

謎のカタカムナ文明 1981年 德間書店

阿基 米得 (あき よねと)

東北大学理学部卒、科学ジャーナリスト、
イルミネ・サイエンス協会主宰

「カタカムナ文献」それは、太古から密かに連綿と伝えられてきたと一部の人々に信じられている謎の古文書である。昭和25年ごろ樺崎 露月(ならさき こうげつ)が、六甲山中で平十字(たいら とうじ)と名乗る人物から筆写を許されたものである。樺崎はこの文献を解読した結果、これは太古の日本列島(10万~数万年以前)に棲息していた人類が残した、失われた超古代科学書であり、彼はその「上古代人の直觀科学」を自ら復興し、「相似象学」と呼ばれる秘教科学の奇妙な体系へと導いた。

このカタカムナとそれにまつわる種々の物事が、古代史マニアのための単なる愛玩物や三流SF作品のタネ、あるいはエコロジー的な政治運動の小道具のようなものでしかないなら、ことさらとり上げるに値しない。

ここでのアプローチは別の角度、最も広い意味での鍊金術を土台としたものである。とはいっても、鍊金術というと、幻想的擬似科学を連想するのが今までの常である。だが鍊金術の基盤には、じつは突き止めることのできないほどの古い起源をもち、連綿と知(サイエンス)の歴史の底流を支え、そして機械論的な発想構造をもった17世紀以後の西欧近代科学の肥大によって押しつぶされた別の科学の流れ、秘教科学(オカルトサイエンス)があったのではないか。さらにカタカムナと相似象学はその本来的な意味と根拠を探り出すのにも非常に有効なものとなるのではないか。と見当をつけた。このオカルトサイエンスはいま、現代科学の行き詰まり(核戦争の恐怖、自然破壊、環境汚染など)を克服する可能性を指すものとして多くの人々に強く期待されている。それどころか無公害、無尽蔵のエネルギーを開発し、抑圧的なユダヤ(=キリスト)教の原理を否定する新文明を確立する大立役者であるとさえ見なされている。

イヤシロチ(弥盛地)とケカレチ(気枯地)

樺崎は植物や農作物のよく育つ優勢地帯と不毛な荒地となる劣勢地帯とが、ある特殊な規則性をもって並んでいることを発見した。

樺崎はこの事実と大地電気の分布が対応していると考え、全国各地の大地電気を測定して回った。そしてカタカムナ文献に出会い、次のようなサトリを得た。

- ヨモ(四方)のタカミを結ぶところは、イヤシロチにてミソギに良し。
- ヨモのヒクミを結ぶところは、ケカレチにてミソギに不良はず。

タカミ(隆身)とは地形の高い凸状、すなわち山や丘陵、森林などの高頂部である。このタカミが同じ方向に重なり合って見えるとき、真後ろを振り返れば、また同じようにタカミが重なり合って見えることが多い。つまり上から見るならばタカミが一直線上に並んでいる。これを「高位線」と呼ぶ。

ヒクミ(低身)とは地形の低い凹状、すなわち山の鞍部や谷、森林では高さの低い部分をいう。このヒクミもタカミと同じようにやはり一直線上に並ぶことが多い。これを「低位線」と呼ぶ。

この高位線と高位線を結ぶ交差地点がイヤシロチになる。イヤシロチとは、生命力を盛んにしてくれる土地、また低位線と低位線を結ぶ交差地点がケカレチでそれは元気をなくしてしまう氣(け)の枯れた土地を意味する。

イヤシロチでは地表の電子密度が高く、還元電圧地であり、ケカレチでは地表の電子密度が低く、酸化電圧地である。イヤシロチに建てられた旧家の人たちは、健康で長生きすることが多く、農漁畜産物が優良で収穫も多い。

これに対してケカレチでは住人がよく変わり、よく病人が出、建造物が破損されやすく、交通事故の起こりやすい「魔の道路」であったりする。

イヤシロチにあたる山の形と、高位線上の植物の生育の形、あるいは岩石の形、さらに雲の形までが相似している。もっとも相似を見分けるためには慎重に注意深く、見る場所を選び、さらに相似性を見分ける柔軟で鋭い感受性を持つ必要がある。

この現象は単に自然物の形が似るという次元ではなく、動物や植物の生理現象や人間の精神現象をも貫くという。じつに恐るべき宇宙の根源的システムであるといわなければならない。

この相似現象は地球のスピン運動と軌道運動に関連して「地球の各圈層において、球心部と同期に変動する位置勢力波動が存在し、しかも各圈層の位置勢力波動の速度は球心部より放射状につまり重力方向に拡大して加速された位置勢力となって分布している。」ために起こる。

「天然」を人工的に呼びもどす植物波農法

従来のいわゆる自然農法を支える基盤として、「天然自然に帰れ」という発想があるのに対し、植物波農法には、合言葉としては明確だが内容はあいまいなこの発想を一たんは切り捨て、その上で「天然」を人工的手段によって呼びもどそう、しかもあまり手のかからない方法で、という積極さがあるようにみうけられる。

植物波農法の特徴、それは次の二点に集約される。

- (1) 植物の生育にとってなによりもまず大切なのは、生育する環境がイヤシロチであること。自然農法でうまくいったことがあるにしても、たまたまそれがイヤシロチにおいて営まれたからにすぎない。あるいは無意識のうちにイヤシロチ化していたのである。
- (2) 農業技術の根本原理を、漠然とした昔ながらの知恵や名人芸から、はっきりとした認識の次元まで引き上げたものであること。そこでなによりも大切なのは、大地電気・大気イオンの条件であり、触媒・根圧・輻射圧・温度差・地下堆肥などの物理である。

植物波農法の「植物波」とは、あまり聞きなれない言葉だが、これはいったいどういうものだろうか。

植物の細胞は(もちろん動物にもあてはまるが)、つねに非常に短い周期(1000分の1秒まで確認されている)のリズム的な変動をおこしている。いわゆる生物時計である。アメリカの生物学者J・ウィルダーによると、この変動リズムこそ、「生物界の秩序と無生物界の無秩序とを分ける自然の根本原理」だという。

細胞中の振動リズムは、細胞の緊張——弛緩という二つの相の交代により生ずるとみられる。この過程は細胞内のイオン運動の変化、および細胞膜の電位の変動によって説明される。

たとえば濃度のちがう二種類の食塩水を半透膜でへだてて容器に入れ、電流を通じる。半透膜をはさんで陽イオンと陰イオンが移動しているわけだが、半透膜には電位のリズム的变化がみられる。細胞中においてもこれと同じように、細胞膜に電位の变化がおきているのである。

これが植物となると、多くの細胞からなる一つの系であるから、それらが互いに影響を及ぼしあい、周波数が低く複雑な形の重畠波として検出されるようになる。だが、それらの細胞の生物時計がどのような相互作用をしているのか、また全体の生物時計の進み方を支配するのはなにか、それは現在のところまだよくわかつていはない。

植崎は、このような植物における電位変動の現象、「植物固体の組織器官の各部位にあらわれる重畠位相波」を「植物波」と略称している。この植物波は、人間でいえば脳波や神経活動電流にあてはまるものだろう。そして脳波と同じように、植物波に異常波が出れば病気の状態であるし、活性波型ならば健康であるわけである。さらに彼は、植物波を支配するものが何であるのかを明らかにしている。それは「植物個体内外の環境」である、とこともなげにいう。ところが現代科学は、この環境性というものを切り捨ててしまう傾向にある。逆にいえばそういうところに科学は立脚しているわけである。

これに対しても植崎は、植物個体以外の環境を除外してしまうのではなく、環境全体というものを中心にして考える。環境のパラメーターとして、温度・湿度・圧力・光線・赤外線・紫外線・空気のイオンといったものを誰でも思い浮かべることができるだろう。

だが、植物にとって最も重要な環境はそのようなものよりも、大地・大地電気である。すでに述べたように、大地電気と植物の生育には深い関係がある。また大地電気は、大環境・宇宙空間に潜在する「位置勢力」とも密接に結びついている。

「位置勢力」は分布にかたよりがあり、またつねに変動し続ける。このことによって電子を発生・消滅させ、電流が流れるという。これが植物においては植物波として電気的に検出されることになるのである。

だから植物波農法では、従来の農法が肥料の栄養学的性質や作用の生理に重点をおいているのに対し、土壤に重点をおいている。いくら大量の肥料を施しても、いくら良い品種の作物を植えようとも、大地の電気的条件が悪ければ何にもならない。土とは固体と液体と気体からなる粘土や有機物などの集まり、すなわち、三相(気相・液相・固相)の土壤コロイドとみることができる。土は死んだ冷たいかたまりではなく“生きている”のであり、土は生物が成長するのと同じように、環境の変化に

即応した形態をそなえる。

そして土壤コロイドの生きた姿は電気的に見ることもできる。このコロイドは土中での物理・化学・生物的な分解と合成作用の反応をコントロールする。コロイドは粒子が小さいので単位重量あたりの表面積が大きくなり、界面エネルギーの影響が支配的になって、物理的・化学的な反応が非常に活発となる。

コロイド微粒子は、土という内臓を形づくる細胞に相当するといえよう。そうして「電気の手」をもって土壤塩基の受けわたしをはじめるのである。

この「電気の手」の数は「塩基置換容量」とよばれ、土壤の肥料を保持する力の目安にされてる。塩基置換容量の大きい土壤は肥料の保持力が大きい。だから単純に考えれば、肥料の保持力を大きくするには、粘土や有機物の量を多くすればよいということになろう。

しかしそれにはいろいろと限度があるし、問題は電気の手の数である。そこで植物波農法では、直接に大地の電位を高めるというきわめて特異で画期的な方法をとる。それが、炭素質の埋設だ。炭素埋設とは、地面に深さ1メートルほどの穴を掘り、そこに木炭を5~6俵ほど埋めるという、じつに簡単にみえるものである。だが、この作業により、半径15メートルの範囲がイヤシロチ化するという。

原子転換

ツクシは昔から民間療法で重宝された植物である。たとえば結核にかかったとき、このツクシを食べたり、あるいはその煎汁を服用したりすると、結核空洞の石灰化がおこり、結核が治ってしまう。

これはツクシに含まれている有機カルシウム分の作用のせいである。生長したツクシには70パーセント以上のカルシウム分が含まれているといわれる。

ところがカルシウムをほとんど含まない、ケイ素ばかりの土地に育ったツクシでも、やはりそのような大量のカルシウム分を含んでいる。もちろんその胞子にも、カルシウム分はほんの少しばかりしか含まれていないのに、である。

それならば、生長したツクシのもつ、この大量のカルシウム分はどこからやってきたのだろうか?

結局、次のように考えるほかはない。ツクシは、土中から吸収したケイ素と、空気中の二酸化炭素から分離した炭素を融合して、カルシウムに転換したのである、と。ケイ素の原子量は28、炭素の原子量は12、これを合計すると原子量40、つまりカルシウムになるのである。

野原に生えている小さなかわいいツクシが巨大なサイクロトロン装置のようなことをやってのけている。これに限らず生物はこのような能力を持っている。さらに自然界のあらゆるところでバクテリアやカビや酵素のはたらきにより、原子転換が行われている。カタカムナの文献では「ミトロカエシ」言葉で伝えられている。それはミトロ、すなわち気体・液体・固体という三つの相がコロイド状態になった、三つの異相界面の作用によって物性を変える還元の方法である。しかしながら、ここでいう還元、すなわちカエシは単なる「酸素を奪う」あるいは「電子

をつけ加える」という概念から大きく拡張される。

ミトロの状態では還元とよく似てはいるが、それよりもはるかにスケールの大きい宇宙的規模の現象が起きているのだ。

沼地の中や生体内など三相コロイド状態における原子転換、低温・低圧・低エネルギーの原子転換がそうである。だがじつはそれだけにとどまらない。さらに生命の自然発生がミトロカエシに含まれるのだという。

生体エネルギー

人間には7つのセンターがあり、人間としてのさまざまな機能を管理している。それは本能のセンター、知性のセンター、感情のセンター、運動のセンター、そして性のセンターという下部の5つのセンターと、高等なる感情のセンター、高等なる思考のセンターである。さらに人間を7つのカテゴリーに分けることができる。

1) 運動と本能のセンターが優勢な肉体的人間。

2) 感情のセンターが優勢な感情的人間。

3) 知性のセンターが優勢な知性的人間。

これら3つのカテゴリーの人間は同じような低い段階にあり、日常生活においては、このような人間にしか出会うことはない。また現代の心理学が取り扱うのもこの種の人間なのである。

4) 組織化された訓練によって「重心」を確立することのできた人間。

性のセンターを独自に働かせることのできる人間で、自分がなんであるかを知るよりも、自分がなにになりうるか、つまり人間の発展の可能性を探るほうに重点をおく。しかしながら、この第4の人間といえども、高次のカテゴリーに入るための訓練においては、初步の段階のものでしかない。

5) 通常の人間とは異なって、はじめて自己意識を獲得できた「自覚」の状態にある人間。

自己の全体を同時に知り意識的になることができる。

意識についてわれわれは、「意識の流れ」とかいうふうに、のっぺらぼうで連続的・等質的なものとしてとらえがちだ。しかし人間はふだん、とぎれとぎれの意識の中で生活していて、なにもおぼえてはいない。ただ、意識が高揚したときに記憶をとりもどせるので、それをうまくならして意識が連續しているように錯覚しているだけなのである。

人間は4つの意識状態をもつことが可能である。その4つとは、眠り、目覚めの状態、自覚、客観意識である。

通常の人間は極私的な「眠り」の状態と、主観的幻想にひたりきった「目覚め」の状態、この二つの状態の中で生きているにすぎない。

これらの状態の上に、「自覚」の状態がある。通常人もそれを所有していると信じこんでいるが、それはとんでもない錯覚である。ごくほんのたまに運よくこのような瞬間を得るだけで、それに対する支配力などまるでもっていないのである。さらにその上に「客観意識」があるが、正しい方法と正しい努力による以外、まず決して到達できないものである。

- 6) 通常の人間では理解できない新しい能力をもつ未知のタイプの人間。
- 7) 「太陽系の範囲内で不死となる」と表現されるまったく未知のタイプの人間。

これらのセンターが活動するのに必要なものが生体エネルギーである。

さらに生体エネルギーに関するさまざまな実験から、当初には予想もされなかつた問題がおこった。それは生体電気エネルギーが、今まで知られていたようなエネルギーとはちがう形態をもっているようなのである。

たとえば電磁気エネルギーの速度は光速に等しい。ところが生体電気エネルギーの運動のしかたと速度はそれとは根本的にちがっており、きわめてゆっくりしていて1秒間に数ミリという感じだった。運動はゆっくりと波状であり、腸管とかヘビの動きかたによく似ていた。また器官の感覚や性的興奮のゆっくりとした上昇にも対応し、動物体組織の高い抵抗によって速度が減少した。

生体電気は、これまで考えられていた電気の概念からあまりにかけはなれていく。そこでいわゆる電気というよりも本質的な、これまで知られていなかった形のエネルギーが潜んでいるのではないか、と考えるようになった。のちにこれを「オルゴン」と呼ぶようになる。